

芹沢光治良

第四卷・出 発

人間の運命

人間の運命

第四卷・出版

芹沢光治良

人 間 の 運 命

第四卷 出 発

昭和38年11月26日 印刷

昭和38年11月30日 発行

定価 400 円

著 者 © 芹 沢 光 治 良

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社

東京都新宿区矢来町71

振 替 東 京 8 0 8

電話東京(260 1111~9

印刷・株式会社 金羊社 製本・神田 加藤製本所

乱丁本はお取替いたします。

© by K. Serizawa. Printed in Japan

人間の運命

第四卷 出版

第一章

石田家では、九年ぶりに、黒い大門が大きく開いた。

松柏苑に高貴な方々をお迎えする時にしか開かないために、御成門とも呼ぶが、明治天皇の崩御の三カ月前に、皇太子殿下の行啓を仰いだ春以来、ずっと閉じたままの大門である。当主の孝造が石田家を相続してから、はじめて開けたのだ。

松柏苑は石田家の私庭であるが、明治の中葉に桃郷とうきょうの海岸に御用邸の設営がなつて、年々、皇后陛下をはじめ、皇太子殿下、皇孫殿下等次々に四季を通じて過されるようになってから、しばしば松柏苑に微行で行啓があつたために、この地方の名苑として喧伝せられたが、石田家もまた、その行啓を光榮として、松柏苑を整備した。

明治天皇の崩御後、間もなく先代の孝右衛門が死亡して、諒闇中には、皇太后陛下が御用邸に御滞在になつても、微行の行啓もなく、松柏苑の盆栽や自慢の桜草の花鉢等をお目にかけて、お慰問申していたが、大正天皇のご即位式の大典も目出度くすんだので、皇太后陛下のお成りを、御用邸にお願いに上つた。それは、孝右衛門の未亡人美枝の切なる希望であつたが、

桜草の満開期に微行なさるといふ御内意があつて、石田家では恐懼感激して、四百種もある桜草の鉢を特に吟味し、雛段も新たに用意して、光栄の日を待った。桜草の蕾がようやくほころびはじめた頃、皇太后陛下は御用邸でご不例になり、ご平癒祈願の甲斐もなく、海浜の松林のなかの御用邸で崩御して、再び諒闇となった。

その後、松柏苑には、高貴の方々のお成りがなく、佳い時代は明治の御代とともに終つたと、華族出の美枝はしばしば家人に託^かつていたが、また、大正天皇が皇太子時代に幾度もお成りがあつたから、そのうちには思い出を懷^かしまれて、微行でお成りがあらうと、家人を励ますようにして、自己を慰めていたが、米騒動の最中に、台風^{台風}に吹き倒されるように、突然亡くなつた。

その義理のある母堂の死去で、当主の孝造は先代の死後ようやく石田家の主権を完全に掌握したが、さて、完全な戸主権を握つて家計を調査してみると、懸念してたとおり、戦国時代から連綿とつづいた旧家も、農地に経済基礎をおいたためか、土台が腐蝕して、このままでは崩壊しそうであつた。それに氣付いて、先代は死の直前に、家憲によつて子弟を土地や家庭にしはるることなく、欲するまま自由な天地に放つようと遺言して、文明開化に適しなくなつた家憲を、祖先のもとへ持つて逝くと、言つたのであらう。それ故、孝造も二十三代孝右衛門と改名すべき伝統を拒否して、石田孝造という新時代らしい名前で、この旧家の再建をするぞと、親族縁者に決意を示した。

その第一の努力として、孝造は相続するや否や、旧家に巢喰う食客の整理にかかった。これ

は美枝の不興を買ったが、先代の茶飲み友達とて、ただ軸を掛けかえるだけの仕事をしている老人一家や、美枝の服装の見立てをするだけの婦人一家や、お茶やお花の相手など、美枝の親戚筋にあたる人々を、たとえ屋敷は広いからとて、家庭のなかに抱えこんでいるのは、子供等の教育上面白くないからと主張して、食客を整理したが、それによって下婢の数をへらすことにもなった。しかし、松柏苑をそのままの形で存続しては、家計の再建も困難であったが、孝造はそれについて苦慮した。

松柏苑は石田家の象徴として外部に誇示するもので、これに手を触れることは、世間の思惑があつて、できなかった。特に、美枝が家名を重んじ、皇族の行啓をかたじけなくすることを家の譽ほまれとしてゐるだけに、その生存中は、松柏苑の存在が家の癌であるということさえ明らかできなかった。

美枝が亡くなつて四十九日の法要もすまないうちに、孝造は執事の戸田から、庭師達の待遇改善の申出を受けた。五人の庭師が米価の値上りを理由に、給料を二割上げて欲しいと、共同で要求したということであつた。米価が騰貴したというが、五人とも石田家の子飼いの家来のような者で、石田家で家もたせ、家族の食糧に米の配給をしているので、孝造は肚にすえかねた。

「これも、旦那の当世向きな方針に、庭師等も協調したものと考えられます」

老執事は、孝造の建直し方針に、日頃いなく不満を、そんな風に皮肉に響かせた。

「よし、大熊と直接に話してみるからな」

孝造は早速松柏苑の方へおりて行った。家来であり、味方であり、石田家に忠誠をつくすものと、安心していたが、庭師も結局、小作人と同様に、敵に廻って矢を向けるのか。立腹して、頭に來たが、考えれば、これが新しい時代で、何事も合理的に割りきるのである。貧乏人は自分達とちがって身軽であるから、自己の利益で割りきって、過去も恩誼も簡単にすてられるのであろう。残念だけれど、感情を交えては、石田家の当主の沽券にかかわるぞと、孝造は自分をたしなめて、静かに庭師頭を探した。

松柏苑には、庭師は誰もいなかった。苑の横にある倉庫前のひだまりに、むしろを敷き、五人ならんで、各自一箇の盆栽を前にして、その枝ぶりに見入ったり、鉢から盆栽を出して根を点検したり——その一人一人に、庭師頭は注意をしていたが、孝造が近づいて様子を黙って眺めていると、

「今から冬眠の用意をしてやらなければなりませんので——」と、孝造の方を見上げた。

大熊や庭師達の手になけなれば、松柏苑内の名物である数百鉢の名木も、枯死するであろうが、自分は盆栽に興味も知識もなく、すべて庭師達に委せるより術がない。そう思うと、庭師頭に用があるからと、松柏苑の方へ誘ったが、きついことも言えなかった。

「給料の二割ひきあげを戸田に申出たそうだね。みんなで協議した結果だということだが、承知しなければ、小作人の真似をして、争議でもするってことかね。お前達も知ってのとおり、今年は米騒動の余波で、小作料を一系列に二割値下げして、当家も楽ではない。お前達が働いてくれる松柏苑は、年々維持費がかさむ一方で、一文の収入があるわけでもない。こんなことま

で話すのは、当家では代々お前達を普通の雇人としてではなく、家族の一員のように扱って来たつもりだからだよ。だから、戸田にどういう申出をしたか、わしは聞かないことにするから、大熊、お前から本心を聞かせてくれないかね——」

「旦那様、困ったご時世になりました……植木師になり手がなくなりました。忠吉（庭師）の長男も来春高等を出ますので、この夏休みはお庭へ出させて手伝わせながら、鉢の洗い方からしこもうと思つたところ、本人は鉄道員になりたいから、教習所の試験を受ける、試験勉強があるから、お死にじへ来ないと言つて、わしが行つても、聴き入れませんですからね」

「お前の息子が、悪いお手本を示したからじゃないのか」

「こんなことになると知つたら、あの時、旦那様は、なんと仰しやろうと、忤を師範にやるのではありませんでした。旦那様は、師範ならば、お国で金を出して教育してくれるから、頭のいい子を庭師にすることはないと言つて、却つて忤を励まして下さいましたが……旦那様、お願いですが、この際、四人の者に給料を一割奮発してやつてもらえませんか。他の仕事に行かれたら、代りがありませんから……その分、この大熊は身をひきます——」

「身をひくつて……今大熊にやめられて、松柏苑はどうなる」

「大熊は松柏苑からはなれたら、生きては行けませんから、ご安心下さい。毎日参ります。今迄どおり働きます。ただ長いお家の恩誼にお返し奉公のつもりです。忤もおかげ様で、今度沼津小学校の首席訓導になりましたから……大熊も隠居していいのです、稼ぐこともありません」

「二割の値上げはしよう……が、大熊はあの四人さえいれば、責任をもって松柏苑をやるかい」

「はい、大熊は隠居したことにして、忠吉を頭にすえれば、大丈夫です……松柏苑を手伝う建前で、作男をおかれますが、お家の蔬菜畑には一人で足りましょう。あとはお暇を出されても……庭師だけは目をかけておきませんか、かけがえがありませんから——」

「わしも松柏苑だけは、どんなことがあっても、維持しなければならんからね。この頃天皇様が御用邸にご静養なさっていられるから、以前のように、いつ微行でお成りになるかわからんよ。そのつもりで大熊も頼むよ」

そう孝造は言ったものの、その実、松柏苑も庭師にすてられて廃園になる日が、遠からず来るのだらうと、その時、はっきり意識した。しかし、同時に、石田家の名譽のために、意地でも松柏苑はまもるぞと、自分に言いきかせた。

その年の暮には、執事の戸田はじめ、三人の作男や不要の下婢まで暇を出して、家財が傾いたと蔭口を叩かれたが、松柏苑を維持する方針は変えなかった。

しかし、先代の遺した借財や子供等の教育費や婚期の近い娘達の結婚費を思うと、松柏苑の維持は、孝造の頭を重くした。特に翌年の秋、陛下を沼津駅に奉迎して御用邸へ供奉してから、陛下のご様子が微行のお成りを期待させないことを知って、松柏苑を維持することに意義を失った。皇族方のお成りがなければ、経費を喰うだけの厄介な私庭である。その冬休暇に帰省した長男の孝一は、三月に帝大の三年に進学するが、外交官試験を受けて外交官になる希望

と決意を、孝造に打ちあけた。その時、孝一は「外交官は金がかかるけれど、いいですか、頼みますよ」と、冗談のようにして真剣に言った。

「どうだろう、盆栽を全部売払って、あとを分譲したら、経費も公課もかからないで、家では助かるけれどなあ。孝一はどう考えるね」

孝造も冗談のようにして、日頃胸の奥にくすぶっている思いを、そんなふうに言ってみた。

「どう考えるかって……僕は松柏苑がなくなっても、未練はありませんよ。僕が庭をつくるとしたら、築山だとか、池だとか、人工的なものをみな毀して、桜草を鉢から全部大地におろして、自由に繁茂させますね。家に桜草があるから、捕われるけれど、実は一面にコスモスの畑でもいいですね。花の咲く時には、誰にでも自由に花を採らせられるし——」

「お前はいくつになっても中学生のようなことばかり考える」と、笑ったが、長男が松柏苑に執着がないのに、何を苦しんで、その維持をはかるのかと、孝造は秘かに思った。

孝一の代になれば、廃園にするにきまっているのだから、今から身軽になった方がよくはないか。松柏苑のなかを彷徨しながら、そう考えては、迷い、悩んだ。天皇や皇后や皇太子の御手植の松の前にたたずんで長く動かないこともあった。築山の望岳亭に登って、西風に雪を吹きとばされる凄じい富士山に眺め入ったこともある……さんざん独り悩んだ挙句、盆栽を全部売りはらって、松柏苑そのものは残したらと、肚をすえた。風につけ雨につけ、季節季節に手と金のかかるのは、数百種の盆栽であるが、盆栽をはずした庭の維持には、三分の一もかかるまい。庭そのものを手放さなければ、行啓記念そのものは残り、石田家の名誉をまもることも

できる。その決意を祖先に是認してもらうために、先代がそんな場合に常にしていたように、川名の分家を訪ねて、相談してみた。川名の分家も孝造の苦境を承知していたので、その決意はやむを得ないだろうと承諾した。

さて、全盆栽を一手に買いつてくれる者があるか、それが問題だが、孝造にはあてがあった。旧知の中学校長夫妻の案内で、高場氏の別荘を訪ねて、自然の滝をとり入れた広い庭を見物し、高場氏と世間話などしているうちに、高場氏ならば松柏苑の全盆栽を喜んで引受ける興味と資力とのあることを、見抜いた。実は高場邸を訪問した時、孝造は松柏苑から盆栽をきりはなして売ろうという決心がついたのだった。その決心が川名の分家からも是認されたので、高場氏が最も信頼しているといわれる中学校長を訪ねて、高場氏に交渉方を依頼した。その時、高場氏が松柏苑を見物したい意向があつたので、四月三日の神武天皇祭の午後、松柏苑のささやかな茶会に、高場氏一家を招待したいと、申出た。その頃が桜草も満開であり、庭も最も美しいので、天皇の皇太子時代の最後の公式行啓を仰いだ時のままに、高場氏のために野立の茶会をするから、その時、盆栽をも見てもらいたいからと、校長に案内を頼んだ。その後、高場氏は当日喜んで松柏苑を見物させてもらいたいと、校長を通じて承知した。

それ故、石田家では四月三日に、御成門を大きく開けたのだった――

その日、高場氏は一時半に沼津駅で、校長夫妻と落ちあつて、石田家を訪ねる約束であつた。しかし、三月中旬に、日本は戦後の長い好景気の夢を破るような経済大恐慌によつて、株

式市場は大暴落し、銀行は取りつけにあらうという混乱におちた。そのどさくさに、高場氏の工場の製品を輸出している貿易商社も、存立があらゆるような事態が起きて、高場氏はあわてて別荘から東京へ帰り、その善後策に奔走していて、石田家の招待を忘れた。高場夫人の注意で、その朝思い立って二人で新橋を発ち、別荘に寄らずに、直接に約束の時間に沼津駅へ行った。春休暇を別荘ですごしていた加寿子と一彦も、有名な松柏苑を見物する機会であるからとて、その時間に駅に待ちあわせていた。

もちろん校長夫妻は駅に待っていた。日本を恐怖に陥した経済恐慌も、教育に専念する地方中学の校長には、無関係であるから、従って無関心で、高場氏がその朝まで、東京で苦闘していたとは気がつかなかった。特に、校長夫人は加寿子を見たたん、閃光のような思いに胸を浮きたてた。女子大生であるという噂は聞いていたが、加寿子がこんなにも知的で清楚な令嬢とは知らなかった。うすい茶色の午後の服に、同じ色のスプリングコートを着て、とも色の小型の帽子をかぶり、黒靴に黒の皮のハンドバッグを持った加寿子を、校長夫人はつくづく眺めて、感嘆しながら、石田家の長男である孝一の帝大生姿を思って、秘かに微笑んだ。数年前の夏休暇に、沼津に避暑していた早瀬家の家族を、同じように松柏苑に案内して、その時、偶然に加わっていた早瀬氏の末弟の帝大生と、石田家の長女夏子との結婚の奇縁をつくったが、今度も、孝一と加寿子との縁をとりむすべし、両家から喜ばれるばかりではなく、盆栽の売買など問題ではなくなるだろうと、考えたからだった。

この校長は無慾で有徳な教育家であるとして評判もよく、沼津中学校に在勤すでに十三年で、

父兄から絶大の信頼を受けていた。特に沼津地方の富豪や名士の間に、かくれた勢力をもち得てもいた。それに反して、夫人は派手好みで、社交的で、校長を信頼する名士や富豪の家庭にさかんに往来して、校長夫人らしくないと非難を浴びているのにも拘わらず、内助の功をたてているものと自負して、卒業生の縁談を取り結ぶことに、異常なほど関心と興味をもっていた。夏子と早瀬末雄との結婚を世話したのも、その一例だが、加寿子を見たたん、美男子の孝一が目頭に浮んだのも、夫人の本能のような習性によつたのであらう。この茶会の招待に、孝一がいてくれれば、とりもなおさず二人のお見合になるのだが、孝一が帰省しているだろうか、それが夫人の唯一つの気がかりになつた。帝大も休暇であらうから、帰省していると安心する反面、金持の大学生らしく旅行に出ているかも知れないと疑つた。孝一が家にいるか、いないか、それによつて、この縁談の吉凶をうらなえると、独り胸をわくわくさせた。

一行は沼津駅前で、当時はなお珍しかつた自動車をやとつて、石田家へ向つた――

その春休暇の直前、次郎は帝大の二十四番教室の前で、石田とばつたり会つた。次郎はこれから保険学の試験を受けなければならなかつたが、石田は最後の政治学の試験が終つて、これで三年になれるぞと、解放されたような表情で教室から出て来た。

「君、休みに沼津へ帰る？　ぼくは帰れないんだ。外交官試験を受ける仲間と、この休みから、合宿して勉強することになっているからね。ただ、家で四月三日に御成門を開けて、なんで

も松柏苑の最後の別れの茶会をするから、是非帰れといって、きかないんだ。父がいよいよ松柏苑をこわすことにしたようで、先祖からの名苑の最後の思い出に、天皇家をお迎えした時のように御成門を開けて、松柏苑の名残りを惜しもうと、悲壮な決意らしいから、ぼくも、その日だけは、合宿していても帰省しようと思っているが、君がその日に来てくれたら、ありがたいがね。来るだろう？ 約束してくれない？」

自己の意思をおしつけるのが、石田の癖だ。それを知っているから、次郎も今更咎める気にもならなかった。

「ぼくは奈良へ行くことにしているが、その前後に沼津へ途中下車することになると思うよ。だけれど、連れがあるから、四月三日に沼津に行けるか、今約束できないね」

「今から相手に話して、四月三日に途中下車できるように、スケジュールをつくったらいいいやないの。ね、君とゆっくり話しあいたいことがあるんだ。近頃そんな機会がなかったものね。それに、君にも松柏苑にお別れをしてもらいたいんだ。松柏苑にはぼく達は共通の思い出もあるだろう？ 神武天皇祭の日だよ、約束してくれるね——」

すぐ試験であるから、次郎はそれ以上話していられたかった——

実際、次郎はその休暇に田部氏と奈良へ旅行に出る約束があった。

田部氏は病後の休養に、古都の春を悴とともにしたのしむのだと、三月になる前から、奈良ホテルに部屋の予約をした。帰途、沼津の香貫山麓の別荘で数日すごすのも計画にあった。そし

て、奈良に関する書物を読んで、夕食時など、晩酌で機嫌よくなって、夫人の前で、大和の古寺や仏像などについての新知識を、たのしそうに披瀝するほど、その旅を心からたのしんでいた。次郎は田部氏の前で、夫人にも同行するように、誘ってみた。

「いいえ、お二人でたのしんでいらいしゃい……生きた女体をおがんでいたようなペールが、仏像に興味を持つなんて、次郎さんの影響で……私は喜んでいますよ。安心してお留守番ができますもの」

ペールという次郎の隠語を使って、夫人は答えたが、田部氏に笑いながら言った。

「ねえ、近頃次郎さんがあなたの隠し子ではないかしらと、よく思うことがありますけれど。他人としては、あんまり馬があいすぎるでしょう？……いいえ、そうであつたら、私もしあわせだと考えるから、そう思うのかも知れませんが、そう思っていて、いいでしょうね」

「次郎君、そら、千本沖のメルヘンを奥さんにもしてやらんか」

「千本沖のメルヘンって、次郎さん、なんですの……聞せて下さらない」

「つまらない童話で……忘れました」と、次郎はてれて、真赤になった。

「お前もいっしょに奈良へ行つたら、どうか」と、田部氏も夫人を誘った。

「いいえ、私はお留守番をしていて、お二人が今日は何処の仏像をおがんでいるか、遠くから想像している方が、ずっとたのしいですわ」

そんなにたのしんでいた旅行も、三月中旬の経済恐慌で、あきらめなければならなかった。突然の経済的大地震で、関係のある仕事が、どれも、いつ崩壊するか心配で、田部氏は東京